

青服の少年は、行き倒れていた

青服の少年は、行き倒れていた。武昌一の繁華街、解放路で、五月一日、午前。車道と歩道の段差にうつぶせるようにして。人民服は道路のように汚れて、少年の死体は猫か犬の死体のように丸くなっていた。

行き倒れた少年の脇を、車は激しく往来し、人々は行き交っていた。商店のおばさんたちが、何やらひそひそと言葉を交わしながら、少年の死体を見ていた。

死体はおそらく、僕たちが目撃することになる最後の確実な沈黙なのだろうと、僕は思う。死体は語らない。語らないことよって、一切の饒舌を告発する。死体に語りかける言葉はない。僕たちは僕たちのために、死体に語りかけることができるだけだ。死体に直面するとき、言葉は生者による生者に対する相槌であり、その相互了解であり、死体に対してはモノローグであるというその姿をあらわにする。その相互了解の自閉を突破すること。

僕はガイドブックに従って、列車の售票処を捜して、解放路を行ったり来たりしていた。けどど見つけることはできなくて、もう一カ所地図に載っている武漢長江大橋たもとの售票処を目指していた。微かに後ろ髪を引かれながら、青服の少年の死体をあとにした。

（人民服というものがどういうものか、本当は僕は知らないのだが、沿海地方の都市ではほとんど見かけることはなかった。ここ武漢に至って、ごくたまに青い作業服のような人民服(?)に身を包んだ人を見かけるようになった。街路の掃除や道路作業などをしている人がほとんどだ。街中を歩き来する人々や商店の人々にはまず見られない。)

歩道いっぱいひしめく日用雑貨の露店を眺めながら、解放路を歩いていく。ときおり木立のあいだから黄鶴楼の真新しい建物が視界に飛び込んでくる。さつき黄鶴楼に入場しようとしたとき、チケット売場のおばさんに外国人だと見破られて、外国人料金を取られたときにはちよつとムツとしたけれども、そんな心のぎわめきも今はどこかへ消えてしまった。

※

黄鶴楼は武漢長江大橋の建造に伴って撤去され、現在の黄鶴楼は最近再建されたものだ。入場六元（外国人は一〇元）。

歴史が観光資源として読み変えられていくという中華人民共和国の現在。それは黄鶴楼という建築物だけのことではない。黄鶴楼における詩人李白の独白もまた中国的な感受性という形をとった観光資源として回収されるのだ。

黄鶴楼は五層の堂々たる建築物で、その内部には黄鶴楼にまつわる様々な書や図や骨董などが展示されていた。

最上層には黄鶴楼のミニチュアが展示されていて、プラスチックのケース越しに、観光客たちはコインを投げ入れて楽しんでた。

（中国ではお金はほとんど紙幣だ。上は一〇〇元札から、下は一角札まで。上海では紙幣の他に一角、五角、一元の硬貨を見かけたが、他の都市では見たことはなかった。ここ黄鶴楼で久しぶりに見たのだけれども、その用途はこのように貨幣としてではなかった。）

武昌、蛇山に建造された黄鶴楼からの遠望ははるか。武漢長江大橋の先、漢陽側亀山にはテレビ塔がそびえている。薄靄にかすむ長江の流れ。武昌の街並の向こうに横たわる沙湖。並木道のこんもりとして続く緑。

僕は黄鶴楼からの遠望を思い起こして、そのどこか片隅に少年の死体を置いてみる。

蛇山を下り、黄鶴楼をあとにして、武昌政府の記念館（辛亥革命武昌起义纪念馆）へ。

ここは辛亥革命発祥の地。一九二一年一〇月、孫文を中心とする革命派が清軍のスキについて中華民国軍政府を樹立し、辛亥革命の口火を切った。

赤煉瓦の記念館の内部には写真や新聞など当時の情況、歴史的な事実を伝える記念物が陳列されている。

その陳列物ひとつひとつの内部には、激動の歴史にうごめく民衆の無数の思いがひしめいている。それは目には見えないし、改めて掘り起こされたり、書き記されたりすることもない無名の、匿名の思いだ。革命の正当性とは、おそらくこの無数の、匿名の切実性の凝集、それ以外にはない。綱領（孫文）とは、シンボルなのだ。歴史の根拠としては、それ自体にはさほど大きな意味はない。シンボルが体現する民衆の切実性こそが、時を越えて僕たちの胸に息づまるような思いをもたらすのだろう。

正当な歴史の背後にうごめくもの。それは無数の圧倒的な沈黙なのだ。

僕は辛亥革命という歴史の脇に、街路に倒れていた少年の死体を置い

てみる。

※

微かな物思いを囲いながら、僕は武漢長江大橋たもとの售票処を捜した。地図に記された場所の付近を行ったり来たりしたが、售票処を見つめることはできない。おそらく蘇州がそうであったように、街中の售票処は廃止されて、火車站に移されたのだろう。

あとで火車站へ行ってみることにして、快餐屋の屋台で弁当を買って、食べた。

長江沿いの臨江大道から小道を入っていく。人通りのない小道をしばらく行くと、中央農民運動講習所旧跡の門があった。かつて毛沢東が農民運動の指導者を養成したという場所だ。門から覗いてみると、瓦屋根の平屋、農家の納屋風の建物が見えたが、人影もなく、また門番の人もいない。たぶん昼休みかなにかで閉じているのだろうと思って、写真を一枚だけ撮った。

街中でしばらく迷子になる。緑豊かな並木道を行ったり来たりして、ようやくバス停を見つけて火車站へ。

武昌火車站前のロータリーを渡り、候车室のある駅舎を通り過ぎていくと、その隣に售票処があった。中を覗いてみると、東部、南部、北部方面など、各方面行きに窓口が分かれていて、それぞれの窓口の前には、人々が行列をつくっていた。行列の後方は整然としているのだけれども、窓口では割り込みの人も混じって、ひとつの窓口にひしめくようにして、チケットを手に入れようと争っている。

その混雑を目にして、僕は怖じ気付き、外国人窓口を捜した。(黄鶴楼で外国人だと見咎められたことも影響していただろう。)しかし、たったひとつあった外国人窓口は休み時間でもないのに閉じられていて、しばらくは開きそうにもない。仕方ないので、中国人たちに混じって南部方面行きの窓口に並んだ。

気を抜いてぼんやりしていると、ちゃっかり横入りされるので、前の男に体をくつつけるようにして、ひたすら順番を待った。窓口が近づいてくると、ポケットから人民幣を取り出して握りしめる。そして団子状態になつて揉みあう窓口の混雑に突入していく。横から手を突っ込んで行き先をがなりたて、チケットを手に入れようとするズルい奴らを肘や背中

堰き止めながら、お金を突き出して、

「明天的、二五五次、到岳陽」

と、負けないくらいの大声で告げる。

事務員の女性は窓口の向こうで足を組んでふんぞりかえるような格好で客あしらいをしていた。命令口調で列車を確認し、チケットとおつりを投げて返した。

チケットとおつりを握りしめて、団子のようになった窓口の混雑にもみくちやにされながら、ようやく行列の外へと吐き出される。

ちなみに岳陽（イェヤン）まで硬座料金は一〇元、空調費一・五元、保険費一元だった。保険金額は三万元、約六〇万円だ。

とにかく、チケットを手に入れることができたので、ほっとひと息。售票処前の売店で冷たいジュースを飲んだ。

売店前に座り込んで煙草を吸っていると、女が何やら声をかけてきた。たぶん宿の客引きなのだろうと思って、無視。

しばらくすると、おばあさんの物乞いが数枚の一角札を握りしめて、お祈りをするように小さく上下に振りながら、物乞いをする。ポケットから一角札を取り出して、あげた。おばあさんの物乞いは何事か呟きのような言葉を残して僕を離れる。

火車站から四三路のバスで小東門へ。行くつもりが、僕の思惑とはうらはらに環状の四三路バスは逆方向へ。小一時何かかって街をひとまわりし、ようやく小東門到着。

小東門から東湖（トンフー）へ行こうと、一四路のバス停を捜す。バス停は見つからず、バス路線に沿って歩いていくのだが、どこまで行っても一四路のバス停はない。民主路に沿って三〇分も歩いただろうか、体育館や省政府のあるやけに広い印象の所で、八一路という道路表示を見つけて、引き返す。いつのまにかバス路線を外れていたのだ。

省政府の立派な建物には『毛沢東思想万歳』というスローガンが掲げられてあった。街中のにぎわいをすいぶん外れた所だったので、そのスローガンはいかにも時流を外れてふさわしいという気もしたのだが、一方では今も人知れずその権力を発動しつづけているという不気味な印象もしたのだ。

八一路と民主路の交差点で、ようやくバス停を発見。竹箒を手にした道路掃除のおばさんの仕事を眺めながら、しばらく待って、一四路のバスで東湖へ。

東湖は杭州の西湖と並び賞される湖で、屈原を始めとして数多くの詩人がここを訪れ、数多くの詩を生んでいる。しかしながら杭州の西湖のようには観光化されてはいなくて、ひっそりとして、静かだった。

入場料、三元を支払って、湖の方へ歩いていくと、折しも出発しようとしていた遊覧車の中から車掌が「乗らないかと」声をかけてきた。おそらく有名な詩人にゆかりの建築物などをまわるのだからうけれども、それよりもひとりでゆっくりと東湖を眺めていたかったのでことわった。

静かな東湖岸沿いの道には、何組かのカップルや観光客だけ。鉛色の曇天の下で、東湖の静かな湖面が鉛色に空を映していた。石橋の向こうには木立に囲まれて何かの閣がひっそりと立っていた。

湖岸に腰を下ろして、煙草を吸った。

ふとまた、青服の少年の、死体が思考を過ぎる。

僕は何を物思えばいいのだろう。薄汚れた青服の少年の、犬か猫のような死体を目撃したこの武昌の街で。黄鶴楼からはるかな遠景の内ふとこでビニールシートに品物を並べた露店のおばさんたちや、盲の占い師たちが、それぞれの暮らしをつむぎ出しているこの武昌の街で。その内ふところに辛亥革命の記憶を囲い、售票処の肉弾戦を生き抜いているこの中国で。服務員の横柄さ。言葉なく作業を続ける道路掃除の人。そして『毛沢東思想万歳』…。

もしかしたら、僕の旅は思考をたえず逃走することなのかもしれない。しかし旅がたえず現場（日常）を逃走することだとしても、僕という現場を逃れることはできない。それはおそらく直線的な逃走ではなく、僕という現場を抱えて、それぞれの現場に屈折する、いわば迷走にならざるをえないだろう。

僕の旅は迷走する。それはあらかじめの目的には決して行き着かない。迷走の果てに何かがあるのか、ないのか、何かをつかみ取ることができるのか、できないのか、今は何も言えないけれども。

ふと見ると、どこからやって来たのか、手漕ぎボートが接岸し、若いカップルが降りてきた。手漕ぎボートの男とカップルは何事か言葉を交わし、笑いながらカップルはくつつきあつて歩いていく。男は再びボートを手繰って、静かな湖面に漕ぎ出していった。

煙草をもみ消して、再び湖岸に沿って歩き始めた。湖岸の公園には遊技場があったけれども、人気はなくて、開店休業のようだった。

遊技場の一角に『彩色電腦面相』と名付けられた店が出ていて、何人かが集まっていた。見ていると、VTRで客の顔を撮り、それをパソコンで

プリントアウトし、プリントアウトした紙をハンカチの上に裏向きに乗せて、アイロンをかけて転写するというもの。

目先のきく中国人は、すぐさまその商売にパソコンを導入したというわけだ。

東湖をあとにして、その近くにある湖北省博物館へ。田舎道をしばらく歩いて博物館を見つけたのだけれども、すでに午後四時過ぎだったからか、博物館の入口は閉ざされていた。道路をへだてた農家では農夫が静かに働いていた。

小東門から大東門へ。少しくすんだような街並を歩いていく。歩道の所々には腕時計の修理屋の露店が店を出していた。

露店といっても、修理用の台がひとつだけ。丸イスに腰を下ろして、黙々と時計を修理する男。

あるいは自転車のパンク修理。道端に修理道具を広げて、ただひたすら客を待つ男。

零細の露店がやたらと多い街だ。

荷車いっぱい練炭を積み込んだ青年が、汗をかきながら重い荷車を引いていく。

開放経済の過熱や再開発とは裏腹の中国人たちの庶民生活。

大東門版店でひと休みしたあと、付近の食堂で、三鮮面(三元)と水餃子(一元)を食べた。入口でチケットを買い、それぞれの調理場のカウンターで料理とチケットを交換するという方式。

三鮮面(ラーメンの一種)は味が濃すぎて、また水餃子は豚肉臭くて、あまり食べられなかった。

それから帰り道の露店で行吟閣ビール(一・五元)と紅梅。ビール瓶は返すと五角くれるという。青島ビールはぜいたく品なのだ。

明日の岳陽行き列車、二二五次は七時武昌発、岳陽着は一時。岳陽にはちよっと立ち寄って、岳陽楼と洞庭湖を眺めるつもりだ。